

<[SMGレポート 3004] 序文>

とある報道番組で、ふと我に返る場面に遭遇しました。…最初に受け取った者から、次の者へ荷が手渡される。渡された者は、その先の地点で待つ者までそれを届ける為移動し、元の位置に戻る。三番目の者は、同様に四番目の者にその荷を受け渡す。ベルトコンベアかロボットを使えば、瞬く間に完了しそうな行為を、人が繰り返し繰り返し延々と続ける。一見すると無駄以外の何物でもなく、恐ろしく生産性の低いこの行為を、敢えて継続している(させている)事業者が、最後進国と云われる地域にはある様です。一体、どうしてなのかー? 多少なりとも機械や車両はあるであろうに、なぜ事業者は、そんな時代遅れの状況を拱手傍観しているのかー? 答えは、意外な処にありました。

その行為が「仕事」だからーなのです。コンベアやロボットでは、作動か動作に過ぎないものが、人間が関われば仕事(労働)になる。仕事であれば収入が生じ、収入が生じれば次の世代が育ち、教育環境もインフラも少しずつながら改善されるー。彼の事業者の姿勢には、利便性と効率化に傾き過ぎた私達が、見失ってしまった揺るぎない信念、確固たる哲学が、確かに見て取れるのです。

一方、どこやらの政府がお題目の如く唱え、連呼する「生産性」。まるで金科玉条の様に聞こえますが、その本質は、詰まる処、費用対効果=経済合理性の追求であり、突き詰めれば詰めるほど人の姿は薄れてゆき、終いには見えなくなる自縄自縛の数字の罠ーに他なりません。例えば運転なら運転、配送なら配送という業務を解析し、他業務との難易度を相対化して格付けする…支払う給与額は、その格付けで決定される…担当者の思い入れが強かろうと弱かろうと、真摯であろうと不遜であろうと、誰がやろうとそんなことは考慮の外…業務の難易、軽重が全てであり、実施する人間は無関係ーという世界。

これが、デジタル革命が産み落とすAI恐慌後の典型的な社会の姿、だとすれば、長官再任の際、「グローバルスタンダードに基づいた新しい時代の競争政策」を掲げ、「企業結合の分野においても、競争を制限するようなものに対しては、厳しく対応する」と宣言し、排除措置命令も辞さない構えの公取と、その公取との対決姿勢を崩さない金融庁(親和銀行と十八銀行の統合に向け、他銀への債権譲渡を模索調整中)の何れもが、互に抜き放った刃に、結局空を切らせる事になるかもしれません。旧来のビジネスモデルを前提としたまま、両者とも一体誰を競争相手として想定し、誰を保護し生き残らせようとしているのか? 銀行の敵は、最早銀行からスマホ(ネット取引)に移りつつあり、デパートの競合相手も最早同業者ではなく、通販事業者になって来ているのです。本文では、事業のモデルチェンジや業態の転換、果ては制度や慣習の仕切り直しにまで及ぶ時代状況の劇的変化を、追って見ようと思います。